前期日程

令和8年度入学試験問題

総合問題（学校教育科学）

注意事項

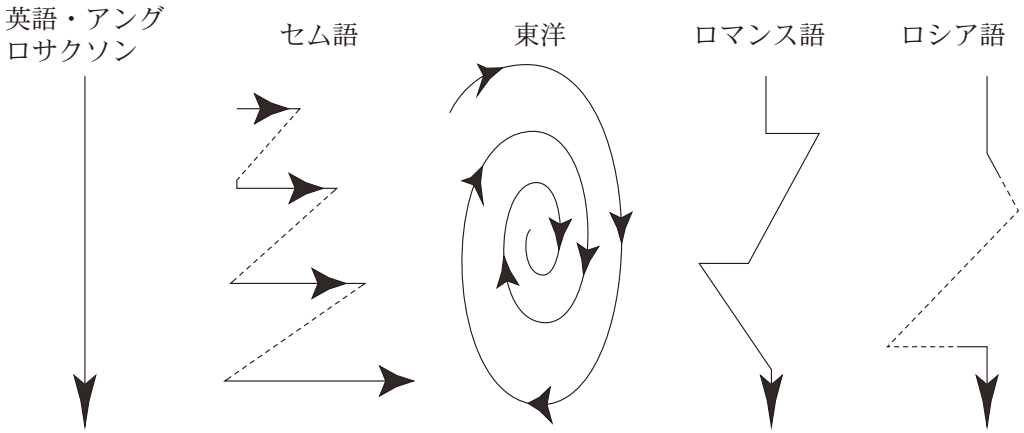
1. 試験開始の合図があるまで，この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 解答はすべて別紙解答用紙に記入しなさい。
3. 解答用紙は4枚，草稿用紙は2枚です。
4. 各解答用紙には，受験番号を記入する欄がそれぞれ1箇所あります。すべて記入しなさい。
5. 試験終了後，問題冊子と草稿用紙は持ち帰りなさい。

問題Ⅰ　次の文章を読み，以下の問いに答えよ。

1．何が＜論理的＞だと感じさせるのか

グローバル化が進み，世界共通のビジネスモデルや教育モデルが示される一方で，文化の衝突は思わぬところで起きている。衝突の影響は極めて深刻なのだが，その実態は見えにくく，意識されずに過ぎてしまうことが多い。たとえば母国で優秀な成績を修めた学生が，海外の大学でつまずくことがある。言語や教育方法の違いがつまずきの理由に挙げられがちだが，母国と留学先の作文／小論文の「論理の展開の違い」に根ざした，思考法の違いが原因であることも多い。

この文化による論理展開の違いをいち早く指摘したのは，アメリカの応用言語学者カプランである。カプランは，大学で留学生の小論文指導を行うなかで，英語が上達してもなかなか小論文が上達しない留学生が多いことに長年疑問を持っていた。そこでカプランは世界 30 カ国以上から来た留学生の小論文を分析し，図 1 のように言語圏別に論理の展開の特徴を視覚的に分類してみせた。



出所：Kaplan (1966：15) の図より筆者訳

図 1　言語圏による論理展開のパターン

カプランの分類によれば，英語圏は「直線的」な展開，ヘブライ語やアラブ語などのセム語圏は類似することがらを詩の対句のように「平行」させて進む展開，東洋は渦巻きのように主題から遠いところより始めて「間接的に主題に近づいていく」展開，フランス語に代表されるロマンス語圏は余談を交えて「紆余曲折」しながら進む

展開と分析されている。そして五つめのロシア語圏は，パラグラフ(段落)の間のつながりがパターン化できないとされている。アメリカ人のカプランにとってロシア語圏の学生の論理展開の解釈が困難だった理由としては，ロシア語圏では美辞麗句と慣用的な表現を使って儀式的に書いたり語ったりする伝統的なレトリックが広く用いられていること，また政治的な理由で意見の直接的な表明が差し控えられることなどが考えられる。論理的というと，英語圏の直線的な論理展開が自明で普遍的なものと受けとめられているが，カプランの分類を見ても，いくつかある型のひとつにすぎないことが分かる。

カプランによれば，読み手が「論理的である」と感じるには，統一性と一貫性が必要であるという。統一性とは，記述に必要十分な要素があることであり，一貫性とは，それらの要素が読み手に理解可能な順番で並んでいることである(Kaplan 1966：5)。これらを総合すると，論理的であるということは「読み手にとって記述に必要な要素が読み手の期待する順番に並んでいることから生まれる感覚である」と定義することができる。

ここで重要なのは，「読み手にとって」という部分だ。世界に共通する普遍的な「必要な要素」とそれを並べる「順番」があるわけではなく，読み手がその社会・文化の中で馴染んだ型があり，そこにはいくつかのパターンが認められるということである。カプランが図１で示した四つのパターンは，その型を視覚的に表現したものだった。「矛盾のないこと」が論理学の三原則のもとになっているように，前後の内容に矛盾がないことが作文でも重要である。しかし，その形式論理の無矛盾の原則を守った上で，読み手と書き手の間に作文に必要な要素とそれらを述べる順番についての合意が必要だということである。つまり論理的であることは，社会的な合意の上に成り立っているものだといえる。だからこそ文化圏によって違いが現れる。それは，言語や文化に左右されない論理学の形式論理とは異なる〈論理〉の考え方である。

論理的であること＝「読み手にとって記述に必要な要素が読み手の期待する順番に並んでいることから生まれる感覚である」→論理的であることは社会的な合意の上に成り立っている

カプランは，「それぞれの文化は文化に特徴的なパラグラフの順番を持ち，言語のこの部分の習得は，その文化の論理システムを学ぶことに他ならない」と述べている(Kaplan 1966：14)。このカプランの主張を各言語の文法の構造とパラグラフの構造の類似から根拠づける人もあるが，「必要な要素とそれを並べる順番」は文法という言語の内的システムのレベルではなく，レトリックが扱う作文／小論文の型(「構造／配置」)のレベルで考えた方がより有益である。各言語の文法の違いが論理の違いの理由だとすると，私たちは異文化で暮らしても母語の影響からずっと逃れられないことになる。しかしレトリックのレベルで考え，異文化の書く型を使いこなすことによって，異なる論理と思考法を手に入れることができる。

2．論理と文化―価値の選択と優先順位

カプランは英語で書かれた留学生のエッセイを分析したために，言語圏別に「直線的」，「平行」，「間接的」，「紆(う)余曲折」の四つの論理展開のパターンを特定した。しかし論理のパターンに注目して文化を分類する方法は，言語や国という単位の他にも考えられる。たとえば，どの国(社会／共同体)にも共通して存在しているのが，政治，経済，法，社会という領域である。これらの領域には領域独自の目的と目的(A)達成の手段が存在しており，それらを混ぜて使うことはできない。混ぜて使おうとすれば，道徳的な警鐘が鳴る。

たとえば，経済領域では効率的に最大限の収益を上げることを目的とするが，この目的を政治領域に持ち込むと汚職となり，法領域では違法となり，社会領域では不道徳となる場合が生じうる。このように四つの領域は独立して存在しているが，どの領域の論理と価値観を重視しているか，つまり国の統合の原理として採用しているかは，教育，とりわけ学校で教える作文を通して判断することができる。なぜなら，教育は知識や技術を教えるのみならず，当該国の伝統や価値観の伝授を重要な目的として持っているからである。

(中略)

では領域が異なると何が変わるのだろうか。まず各領域は固有の目的と目的を達成するための手段を持っている。たとえば，経済ならば利益を上げること，平たく

いえば儲(もう)けることであり，①インプットに対してアウトプットの比重が高いことである。その目的達成のためには，計算による数値の比較によって最も効率がよく安価な手段を選択する。この時，早くて安い手段を選ぶことが重要であり，手段の選択に関して道徳的な配慮は後回しになるし，哲学的な考察は全く意味を持たない。それに対して政治領域では，公共の福祉という目的達成のために，何が公共の福祉になるのか，社会を構成する多様な人々にとっての共通善とは何なのか，その「目的自体」を吟味し，公共の福祉・共通善という理念／理想に適った手段を選択する。理念の吟味には哲学的な考察が重要となり，理想の追求には，理念に対する人々の合意が必要になる。

このように価値観とは，何を優先して何を後まわしにするか(犠牲にするか／切り捨てるか)，その順位づけに現れる。そして優先の順位づけは「何を目的とするのか」によって決まる。

価値観に紐(ひも)づけられた論理を考える時，「どのような論理が各領域で成り立つのか」，そして究極的には「何のために思考するのか」という問いが私たちに突きつけられる。確かに(1)演繹(えき)や帰納などの推論の形式，つまり道具としての論理的思考は多様な場面で役に立つ。しかしより本質的なのは，「どの領域のいかなる価値観のもとで思考するのか」という価値の選択と，その価値に合致した論理の使用である。経済の問題として捉えるのか，政治の問題として捉えるのかによって正しい結論と結論に至る道筋は変わってくる。これを単なる制度(領域)の違い，制度固有の表現形式の違いとして受けとめると，私たちはどのような価値観に基づいて思考しているのか，どのような論理を論理的だと受けとめて思考し，判断しているのかに無頓着となり，予期せぬ文化衝突に遭ったり，判断を間違えたりする。

(中略)

エッセイの型

序論　主張

本論　主張を支持する三つの根拠(事実)

結論　主張を別の言葉で繰り返す

経済原理のレトリックを代表すると考えられるアメリカの五パラグラフ・エッセイ(2)は，証拠を挙げて主張の正しさを証明し，読み手を説得することを目的とする。このエッセイの最大の特徴は，最初の段落（パラグラフ）で結論となる主張が提示されることである。私たちが思考する時には，観察やデータの分析から徐々に結論に向かって推論を進めていくが，それをエッセイの型で書くには，結論を先に述べて実際の思考の過程を倒立させる。

エッセイの効率性は，冒頭で「結論」となるべき主張が先取りして提示されるエッセイの目的論的な構造に起因する。最初に到達すべき終着点が示されるため，主張に関係のない情報が入りづらい。「主張の論証」という目的に向かって，主張を支持する「事実」を三つに制限してコンパクトに論じる。主張の根拠となる三つの事実の間の関係を論じる必要もない。結論へのステップの短さもさることながら，そもそも結論が冒頭に示されているため，読み手はすばやく書き手が何を言いたいかをつかむことができる。このエッセイの構造はよく的を射る矢にたとえられる。「主張」という射るべき的が冒頭に示され，的に向かって最短の距離で一直線に飛んだ矢が，的の真ん中に命中するイメージである。図１の矢印がまさにそれを示している。

論理の入れ子構造

このエッセイの全体構造は，エッセイのパラグラフの構造にも同じ形で反映されている。全体と全体を構成する要素が同じ論理で貫かれているので，それが論理の一貫性と分かりやすさに貢献している。

エッセイの肝となる「主張」は，主題文と呼ばれてエッセイの冒頭に置かれ，あとに続くパラグラフではその主張を支持する具体的な事実が述べられる。同様に，エッセイを構成する各パラグラフも，冒頭にそのパラグラフの概要が一文でまとめられてあり（トピック・センテンスと呼ばれる），その後に具体例で説明する文が続く。トピック・センテンスはパラグラフのどこにでも現れる可能性があるが，多くはパラグラフの冒頭に置かれるため，各パラグラフの冒頭の一文を拾って読んでいけば，全体の内容がすぐに理解できるようになっている。そして，各パラグラフの最後は，そのパラグラフの主張を短くまとめた小結論で締めくくられる。エッセイ

の直線的な論理展開と効率性，明快さは，この全体の構造と部分の構造の一致によって担保されている。

アメリカ式エッセイに馴染んだ者が，彼らにとって自明②のこの入れ子構造を予想して作文を読み，その期待が裏切られた時，「つながりが分かりづらい」，「主張がぼやけている」，「きちんと論証されていない」作文である，つまり「論理的でない」と怒りにも似た感情が瞬時に起こるのは，この構造に込められた仕掛けの単純明快さからも理解できる。

演繹的な書き方―最重要から具体へ

作文教育研究で著名なモフェット（J. Moffett）は，主題を提示する文がどこに現れるかによって作文構造を二つに大別した（Moffett 1968）。主題提示文が最初に現れるものを「演繹的」作文と呼び，最後に置かれるものを「帰納的」作文と呼んだ。この分類によれば，アメリカのエッセイは，演繹的作文である。演繹的作文の完成度は，主題提示文である主張を頂点とした明確な「序列」の堅固さによって測られるという。つまり段落や文章は，主題に直接関係する最も重要な情報から，より詳細な補助的な情報へと並ぶ構造になっている。主張を支持する三つの事実も，最も強く主張を支持すると考えられる事実から順番に並べる。もとの事実に順番がついていない以上，どのように並べてもよいのだが，無自覚に列挙するのではなく，「主張の支持」という目的に照らして最も効果的な配列を考えることが求められている。

エッセイは，「前提」となる主張が最初にぽんと置かれて，そこから具体的事実を判断する演繹に似た形を取る。しかし論理学における演繹的推論の手続きそのものではないため，日本ではこの配置を「頭括型」――最初に主張を置き次に具体例で説明する構成――と呼ぶのが一般である。

（中略）

「ディセルタシオン」と呼ばれるフランス式小論文は，弁証法を基本構造とする。弁証法は，論ずべき主題に対する「一般的な見方」，「それに反する見方」，「それらを総合する見方」を〈正―反―合〉の構成に位置づけて，〈正〉と〈反〉の矛盾を〈合〉で

解決する。これらの三つの見方を検討する中で，結論を導くためにあらゆる可能性が吟味される。弁証法では，この吟味の「過程」そのものが重視される。「……は○○か否か」という二者択一の決断を行う場合も，両方の立場を検討し，〈合〉において「○○である」，「○○でない」の「はい／いいえ」を超える見方，すなわち極端に振れず，過去と現状を超える，より広く積極的なものの見方を提示することが期待されている。この弁証法の〈正―反―合〉の「手続きを踏むこと」が十分な審議が尽くされたことを保証すると考えられている。実際に，資格社会と呼ばれるフランスの資格試験で使われるディセルタシオンは，決められた型で書かないと，どんなに素晴らしい論文でも合格することはできない。型の「手続き通り」に書けることに意義を認めるのである。

もう少し詳しくディセルタシオンの構造を見ていこう。その型は，次のようになっている。

ディセルタシオンの型

導入　①主題に関わる「概念の定義」，②「問題提起」，③「三つの問い」による全体構成の提示

展開　弁証法：a 定立（正）
　　b 反定立（反）
　　c 総合（合）

結論　①全体の議論のまとめ，②結論，③次の弁証法を導く問い

ディセルタシオンは導入部分で，議論の中心になる主題を提示し，その主題を論じる全体構成を示す。この時，鍵になる概念の定義を行い，与えられた問いの，どの側面について論じるかを書き手自身が提起する。これを問題提起と呼び，ディセルタシオンの肝となるものである。そしてこの問題提起を「問い」の形にして表明し，さらに展開部分の〈正―反―合〉を導くための三つの問いに分解して提示することで，論文全体の構成を読者に示す。

展開部分では，書き手が立てた先の三つの問いに答える形で，主題に対する「ある一般的な見方（正）」，それとは「相反する見方（反）」，これら二つを「総合する見方

(合)」を提示してそれぞれの見方を文献の引用によって論証する。そして結論部分では，これまでの議論の流れを短くまとめ，与えられた問いに答えて結論とし，次の弁証法を想起させる新たな問いを提示して終わる(Rénauté et al. 2007：181–182)。

【出典：渡邉雅子『論理的思考とは何か』岩波書店，2024 年，48–80 ページ。なお，出題の都合上，一部を変更・省略している。】

問 1　下線部①「インプットに対してアウトプットの比重が高いこと」および下線部②「自明」を，それぞれ別の言葉に言い換えなさい。

問 2　下線部⑴について，「演繹」と「帰納」の推論の形式についてそれぞれ説明し，その具体例を記述せよ。なお，具体例については，形式が正しければ全体としての結論の真偽は問わない。

問 3　アメリカで主流の作文の型である「エッセイ」が下線部⑵「経済原理のレトリック」を代表するとはどういう意味か，説明せよ。(字数制限なし。ただし，解答欄に収まるように記述せよ。)

問 4　フランス式小論文の形態である「ディセルタシオン」は，下線部Ⓐ「政治，経済，法，社会」にしたがうと，「政治」の原理を反映したものである。その理由を説明せよ。(字数制限なし。ただし，解答欄に収まるように記述せよ。)

問題Ⅱ　次の文章を読み，以下の問いに答えよ。

この個所は著作権の関係で表示できません。
掲載の許諾が得られましたら、表示いたします。

この個所は著作権の関係で表示できません。
掲載の許諾が得られましたら、表示いたします。

この個所は著作権の関係で表示できません。
掲載の許諾が得られましたら、表示いたします。

この個所は著作権の関係で表示できません。
掲載の許諾が得られましたら、表示いたします。

この個所は著作権の関係で表示できません。
掲載の許諾が得られましたら、表示いたします。

この個所は著作権の関係で表示できません。
掲載の許諾が得られましたら、表示いたします。

この個所は著作権の関係で表示できません。
掲載の許諾が得られましたら、表示いたします。

【出典：中室牧子『科学的根拠（エビデンス）で子育て―教育経済学の最前線』ダイヤモンド社，2024 年，150–166 ページ。なお，出題の都合上，一部を変更・省略している。】

問 1　[①]，[③]，[④] に入る諺(ことわざ)を，下記から選び，その数字を答えよ。

1. 鶏口となるも牛後となるなかれ
2. 情は人の為ならず
3. 三人寄れば文殊の知恵
4. 類は友を呼ぶ
5. 百聞は一見に如かず
6. 朱に交われば赤くなる

問 2　下線部⑴「私たちが無意識のうちに，ある強い「前提」を置いてしまっている」とあるが，その「前提」とはどのようなものか。[②] に入る前提を文章で答えよ。（字数制限なし。ただし，解答欄に収まるように記述せよ。）

問 3　[ア] [イ] に入る効果の名称を，文章中の語句を用いて答えよ。

問 4　下線部⑵について学内やクラス内での順位が大きな，そして長期的な影響をもたらすメカニズムには，どのような仮説（可能性）が考えられるか。考えられる仮説（可能性）を，複数挙げて，それぞれ具体的に説明せよ。（字数制限なし。ただし，解答欄に収まるように記述せよ。）

問 5　下線部⑶について筆者は，順位を知らせない方がよいというわけではなく，「伝え方に工夫が必要だ」と述べているが，「伝え方の工夫」として，どのような工夫が考えられるか。本文を踏まえたうえで，教師ができる具体的な工夫を複数挙げて，そのように考えた理由を述べよ。（字数制限なし。ただし，解答欄に収まるように記述せよ。）